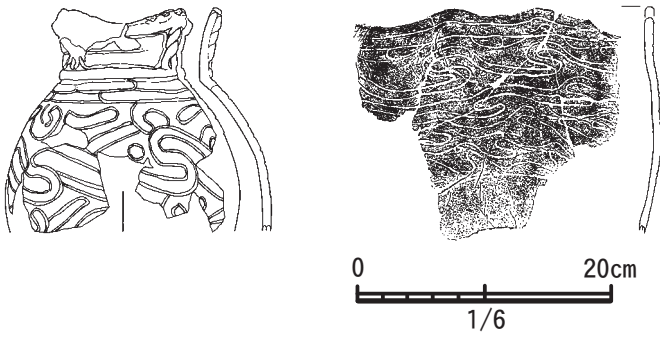


SK517 出土



7SK01 出土



列石D西部土坑盛土直上出土

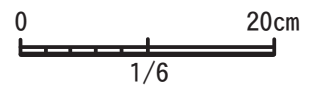
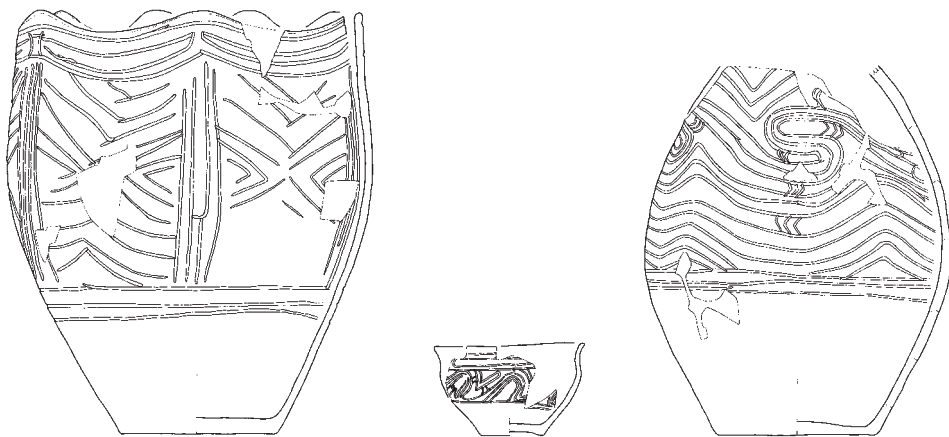
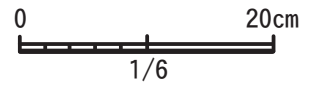
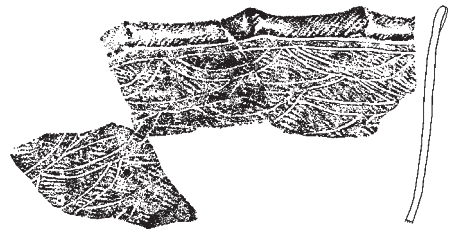
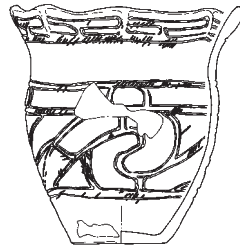
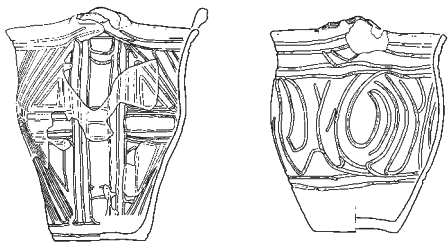


图140 遺構内出土土器 (5)

9P38 堆積土上層出土

11SK10 底面出土



5SQ02 周辺出土



第5次第9列4 トレンチ出土



第22列 トレンチ出土



I-23 トレンチ (SD05 の北端部) 出土

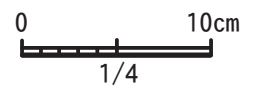
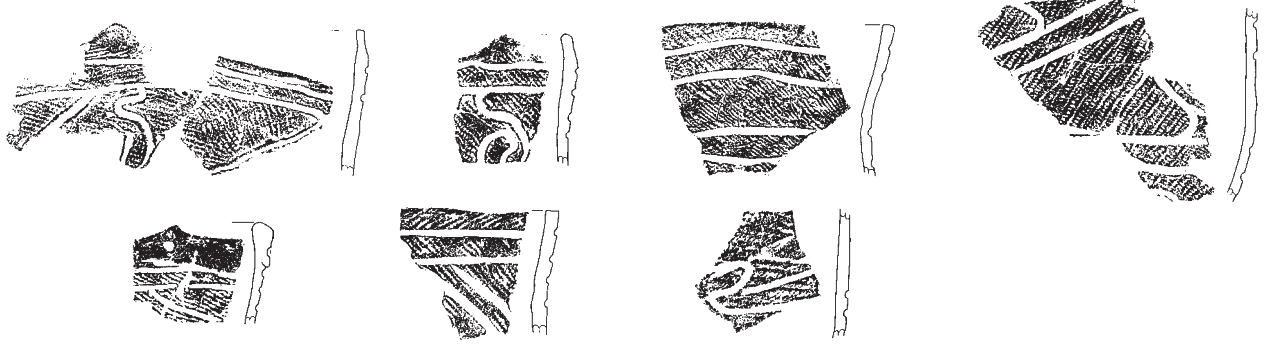


図141 遺構内出土土器 (6)

7次Zトレンチ



G-1 トレンチ



図142 遺構内出土土器（7）

形区画文や、折り返し口縁の深鉢が含まれる。

<SK506底面出土>

エリア①-3の単独のフラスコ状土坑の土坑底面から入組文が描かれた土器が出土した。

<SK508出土>

エリア①-3でSK506に隣接する。連続するS字文を施した土器が目立つ。

<7SK01・第7次調査Abトレンチ>

環状列石Aより北側のトレンチで、7SK01の周囲からは三角形区画文土器や方形文の土器、折り返し口縁をもつ深鉢がまとまって出土した。

<9P38内堆積土上層出土>

大型不整形土坑墓(9SK08)と重複するピットの堆積土上層から並んで出土した。

<11SK10底面出土>

大型不整形土坑墓の底面から出土した。地文縄文上に連続した弧線文を描いた土器などがある。

2. 遺構の変遷

第3章では空間的な土地利用の違いについて重点的に述べた。ここでは遺構の時間的な変遷について検討したい。特に4つの環状列石造営に時間差が認められるのか、或いは同時に構築されたのかは極めて重要な問題である。このため、前述した土器段階設定から遺構変遷をまとめることにした。なお、土器の段階を、以下のようにそのまま変遷期に置き換えた。

第1段階→第1期

第2段階→第2期

第3段階→第3期

第4段階→第4期

上記の設定から、図143の矢印は環状列石をはじめとした遺構の構築期間である。環状列石は地中に掘り窪められた土坑などと異なり、厳密に時期を決定することは難しい。盛土層における出土土器を参考にすればよいが、発掘調査方法から量が少なく、判断は難しい。そのため、列石覆土層から出土した土器片と、列石直下に位置する土坑の時期を重視し、造営期間を想定することにした。

以下、ゾーンごとに遺構の変遷を説明する。

<エリア①-1>

環状列石A・B・Cでは土器は第1段階から出土している。特に列石AやBでは第1段階の土器を埋設土器に利用している。

環状列石A

第2段階の土器が出土したSK470の直上に環状列石Aは構築されているので、造営は第2期以降に本格化した。第3次調査で遺跡の保存が決定したため、下部土坑のほとんどは未調査であることから詳細は窺えないが、第3段階の土器も多いことから造営が第3期まで継続したと考えられる。

構築が第4期まで継続したのか明瞭ではないが、環状列石の内側の土坑にはSK494のように第4期のものも存在する。

ほぼ列石上に位置する埋設土器SR02は第1段階で、埋設土器と列石構築には若干の時間差を想定できるのかもしれない。

環状列石B

列石直下のSK279から第4段階の土器が出土している。構成礫も非常に少ないことから、第4期を主体とした構築と考えられる。列石の延長線上に設置されたSR81は第1期の土器(図139)で、列石本体より古い。

環状列石C

下部土坑の調査は行っていないが、列石覆土から第1～4段階の土器片が多く出土しているので、造営は第1期から始まったと考えられる。列石より北西側は原地形が沢状に傾斜していて、その整地層から第1～2段階の土器が多く出土したので、第1～2期にかけて地形改変が行われ、列石構築が始まったと考えられる。環状列石本体から第3～4段階の土器が出土しているので、造営は第4段階まで継続したと考えられる。

このようなことから、環状列石Cは第1～4期にかけて絶えずつくられ、造営期間が4つの中でもっとも長い。埋設土器は第3～4段階に集中し、他の環状列石と異なり、比較的新しい。

環状列石D

下部土坑の調査は行っていないが、列石本体から第2～3段階の土器が多く出土している。第1・4段階のものは少ないので、造営は2～3期に集中していたことがわかる。

<エリア①-2>

台地北端の配石遺構の正確な時期は、未調査範囲が多いことや下部土坑の調査を行っていないことから不明である。第17次調査で実施したハンドボーリング探査で検出した配石遺構とみられる範囲を調査すれば、明確な時期が掴めるのかもしれない。今後の課題である。

配石遺構から南側に離れたトレンチから出土した埋設土器4 SR01は第2段階で、周辺のトレンチも第2段階が多い。

このようなことから、現段階では第2期が主体である。なお、第4段階の土器はグリッドMK20周辺のみに限られることから、活動は認められない。これはエリア①-1以外の地域全てに当てはまる。

<エリア①-3>

エリアの北側では第3期の土坑群が集中する。後世の空堀の直下には第3期の土坑墓も検出されているので、第3期に集中して利用された。

エリアの南側に広がっている溝状遺構SD05は第2～3段階がみられるので、第2～3期に構築されたものである。

<エリア②>

主要な遺構はSD01と4 SR01である。SD01では段階を検討できるような土器片は出土していないが、周囲からは第2～3期の土器が出土しているので、本地区は2・3期を主体に利用されたと考えられる。遺跡南東のG-1坪トレンチから第1段階の土器が出土しているので、この段階の遺構も分布する可能性もある。

<エリア③>

確認している遺構は5 SKT02のみで、遺物は少ない。遺構外からは第1～2段階の土器が出土している。

本地区は第1・2期に狩猟場として利用された可能性もあるが、この他の性格については更なる調査が必要であろう。

以上のように、エリア別の変遷を述べた。遺跡全体の傾向として、環状列石周辺は第1期から土地利用がみられるが、その他の地区は第2～3期のみで、第4期になると、環状列石C周辺にしか利用されない。第4期にはエリア①-2以南の地区は放棄され、環状列石C周辺のみの活動に制限される。こうして伊勢堂岱遺跡は十腰内I式新段階でその役割を終えるのである。

| | 環状列石 A | 環状列石 B | 環状列石 C | 環状列石 D |
|-------|--|--|---|---|
| 第 1 期 | 7SK10(列石 A より北部) SR02(埋設土器) SR93(列石外周埋設土器) SR156(列石外周埋設土器) SK404(列石外周土坑) | SR81(埋設土器) SK273(列石外周土坑) SR491 | SK31(列石外周土坑) SK272(列石外周土坑) SK469(列石外周土坑) 北西部盛土層(～2期) | |
| 第 2 期 | SK470(列石下部土坑) | SK142(列石内部土坑) SK104(列石外周土坑) | SK136(列石外周土坑) 11 SK10(列石外周土坑) | 10SR01(埋設土器) SK572(列石外周土坑) 列石外周北東9次トレンチ |
| 第 3 期 | | SK28(列石下部土坑) SK38(列石内側土坑) SK282(列石下部土坑) SK288(列石内側土坑) | SK135(列石外周土坑) 6SR03(埋設土器) | 14SR571(埋設土器) 西側土坑群 |
| 第 4 期 | SK494(列石内部土坑) | SK279(列石下部土坑) | 5SR01(埋設土器) 5SR02(埋設土器) 8SK01(列石 C 外周土坑) | |

表25 主要遺構の段階(1)

| | エリア①- 2 | エリア①- 3 | エリア② | エリア③ |
|-----|---------------------|---|------------------|---------|
| 第1期 | | | G-1 坪トレンチ(遺跡南東端) | 7次Zトレンチ |
| 第2期 | 第5次 第9列- 4 5SQ02 | SD05(I-23トレンチ) | 4SR01(埋設土器) | |
| 第3期 | | SK508(台地先端部) SK506(台地先端部) SK514(台地先端部) 17SK596 | | |
| 第4期 | | | | |

表26 主要遺構の段階(2)

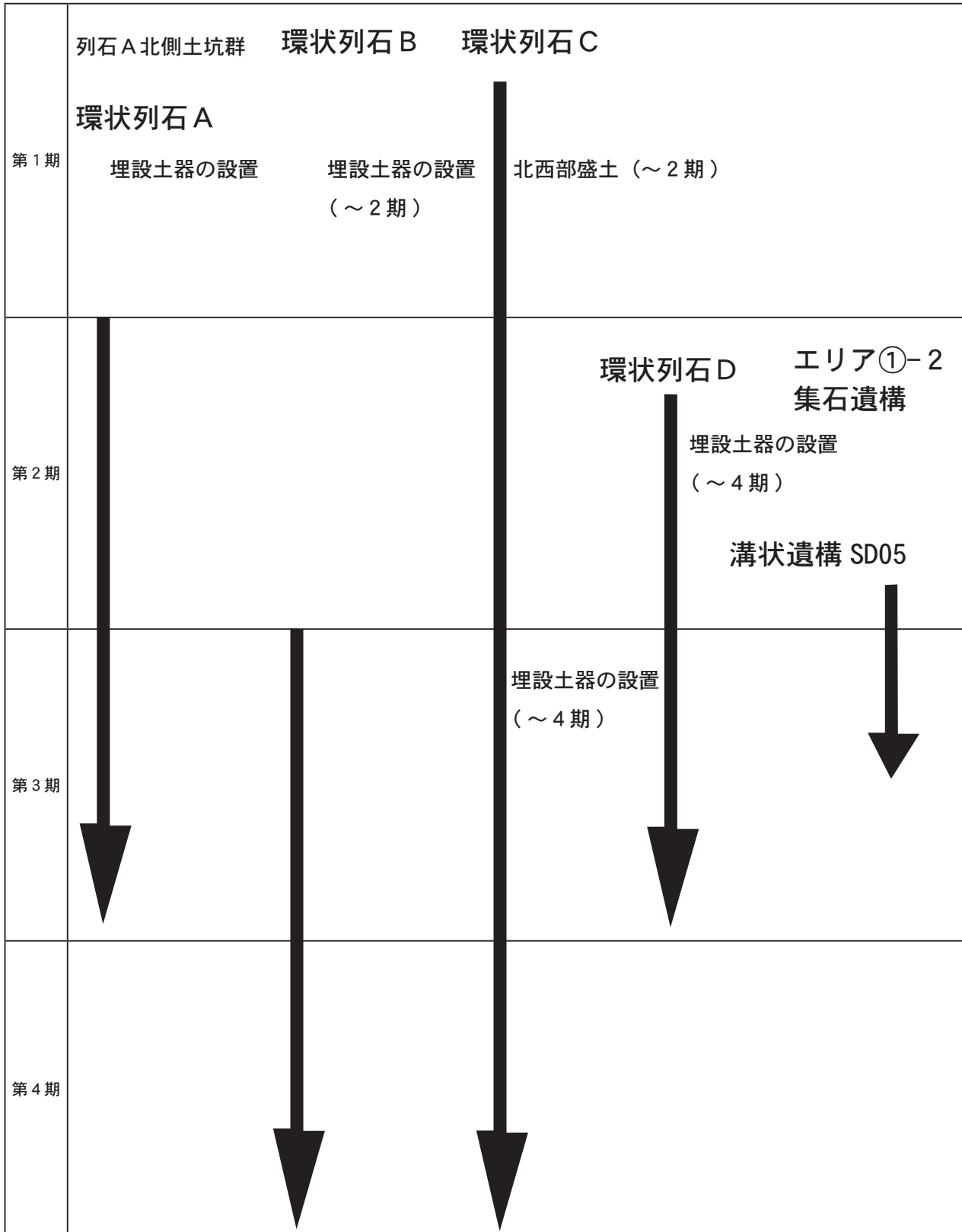


図143 後期前葉における土地利用の変遷

第2節 環状列石の造営

環状列石の造営には造営地の選択、礫の獲得・搬入・造営などの過程が想定できる。

1. 礫の獲得・運搬

環状列石や配石遺構の造営に用いられた礫は、多様な石材を用いている。第5章の自然科学分析でも総括されているように、伊勢堂岱遺跡に持ち込まれた礫は米代川などの河川が考えられる。伊勢堂岱遺跡に運び込まれた礫は、採取範囲は遺跡から同心円状に広がっている遠いところで5～6 kmで採取されたと推測できる。

河川で採取された礫は台地を登って環状列石まで運搬される。本遺跡では谷から環状列石Aの北側開口部に向かって道路状遺構が検出されている。木ヅリのようなもので、地面を引き摺るように礫を運んだことが推測できる。

道路状遺構は向台遺跡をはじめ、多くの遺跡で検出されている(領塚2004)。環状列石などの記念物を保有する遺跡においても多く認められ、湯舟沢Ⅱ遺跡(滝沢村教委1992)や小牧野遺跡(青森市教委1999)、キウス4遺跡(北海道2000)、三内丸山遺跡(青森県教委1996)が挙げられる。これらの遺跡の中には道路状遺構構築に伴う整地があり、本遺跡のそれとも共通する。

2. 造営地の選択・環状列石造営

伊勢堂岱遺跡は湯車川と阿仁川に解析された台地上で、高台で鷹巣盆地を一望できるような、非常に眺望のよい地点である。環状列石は台地のもっとも北西端に集中して構築されている。少し南に移動すれば、十分な平坦面が広がっているにもかかわらず、狭い部分で斜面に盛土するなど、地形を改変し、かなりの労力をかけながら、4つの環状列石を造営できるだけの面積を確保する。

環状列石の造営には、地形改変・礫の設置などの工程を想定できる。環状列石内側を整地して、外帯部分を土手状に厚く盛土し、その上に礫を配置する。小牧野遺跡では環状列石の正面観(遠藤1997)を意識していたと考えられていることから、本遺跡でも同様な可能性を想定できる。

伊勢堂岱遺跡やその周辺の植生についても自然科学分析から明らかになっている(鷹巣町2003)。

本遺跡周辺の植生史と低地の堆積環境を復元するために、ボーリング調査を実施した。3地点で実施したが、コナラ亜属やクリ属を主とする落葉広葉樹林が形成されていたと推測できる。

また、列石直下の土層試料からは、列石造営以前はクマザサ属を含むタケ亜科の算出が目立つ。列石の造成土中ではタケ亜科の他にヨシ属やススキ属の割合も高いことから、列石造営以前はササ類を中心とした環境であり、列石造営後は開けた土地に変化したようだ。列石周辺で堆積した黒色土に微粒炭が多いことについて、鈴木三男は植物を焼き払った可能性も検討しており、小林達雄によって紹介されている(小林2001)。

列石造成土からは湿潤な土地に育成するヨシ属の割合が高い。これについては、周辺の土地から持ち込まれた可能性が考えられ、低地や谷斜面部も活動領域だったことを示しているのだろう。

第3節 検出遺構について

大湯環状列石では環状列石を中心に、掘立柱建物跡・フラスコ状土坑(貯蔵穴)・廃棄帯といった同心円状の構造(鹿角市教委2002)が確認されており、これを佐々木藤雄は重環状構造(佐々木2002)と命名し、環状集落から変化を説明している。環状列石A・B・Cは狭い範囲で構築されているので、列石外周の建物跡は判別がつくが、さらに外周の貯蔵穴がどの列石に伴うのか判断しがたい。この環状構造を把握するために、第11次調査で環状列石Cより東側に調査区を延ばし、フラスコ状土坑(或いはそれを転用した大型不整形土坑墓)を検出し、部分的であるが重環状構造を確認できた。

また環状列石の直下や周囲から土坑墓を数多く検出している。大型不整形土坑墓をはじめとした土坑墓については県教委の調査成果を追認する結果となった。

環状列石を構成する配石と土坑墓は一对一の関係ではないことから、大湯環状列石とは異なり、配石墓の集合体ではないが、環状列石は大型不整形土坑墓の上に構築されるので、下部土坑を意識して礫を配置しているのだろう。

また、環状列石上に埋設土器が配置することがある。埋設土器が埋葬施設であるならば、土坑墓と同様に列石との関係が窺えるのである。

第3章でも述べたように、検出した遺構は数多いが、ここでは本遺跡を特徴付ける重要な遺構について詳しく述べることにした。

1. 掘立柱建物跡の構造について

伊勢堂岱遺跡における4つの環状列石には、他の米代川流域の環状列石と同様に、掘立柱建物跡を伴うことが判明した。大湯環状列石では亀甲型の建物が長軸長：長辺長：短辺長が1：0.814：0.765という平均値を示しており、本遺跡もその規模に大きく違いはない。

環状列石の外周に建物跡が同心円状に分布することが明らかになったのは、大湯環状列石の調査である。6本の柱穴を亀甲型に配置する建物を把握し、建物跡の機能を「モガリ屋」と解釈した。環状列石研究が一步進んだのである(鹿角市教委1986)。

一方、環状列石の外周に構築される掘立柱建物跡を居住施設と考える研究もある(石井1995・1998)。「殯」や「台上墓」などのような葬送儀礼施設・祭祀施設として理解してきた従来の説に対して、大きな問題提起となった。

この動向からも、本遺跡の発掘調査では建物跡の構造を解明できるように努めた。第3章でも述べたように、一般的な建物跡である第1類の他に、配石遺構を伴う建物(第2類：6SQ01・13SB406)を発見している。

これらを踏まえ、配石を伴わない第1類の構造を再検討すると、興味深い事例が浮かび上がった。旧道路予定地部分の調査では多くの建物群を認定しており、列石外周にも焼土遺構を多く検出している。これらを合成したものが図11・17・39である。建物跡の中心に位置する焼土遺構は8基、建物跡に隣接して位置するものが少なくとも5基は認められることから、建物跡と焼土遺構との分布に関連性が指摘できる。

建物跡と焼土遺構との関連性については、類例は高屋館跡(高屋環状列石)で既に確認されていて、

建物跡のほぼ中心に焼土遺構が位置する事例が2例認められる(SN02・SN40)。ただ、遺跡が中世の館跡で後世の影響の可能性も否定出来ないことから、当時はこの組み合わせを極めて慎重に扱っていた(小畑1993)。

高屋例を踏まえると、同様な事例が本遺跡でも確認できた。建物群の中には平地式構造の建物が含まれるのである。大湯、高屋、そして伊勢堂岱の旧道路予定地部分が調査された90年代では、建物と焼土遺構の関連性という視点は、類例の少なさからあまり重視されていなかったが、調査の継続によって新たな事実が浮かび上がったと言える。近年では類例も増えており、伊勢堂岱遺跡から西に約20km離れた芹川館で検出されている。検出された掘立柱建物跡4棟のうち、3棟が地床炉を有しており、詳細な調査から平地式の住居と判断された(秋田県教委2006)。出土土器は少ないが、後期初頭～前葉で、伊勢堂岱遺跡と同時期の集落構成を知る上で興味深い。後期初頭から竪穴住居の深度が浅くなる傾向がある。それが平地式住居へと変遷する建物構造の問題であるのか、あるいは平地式と竪穴住居の併用による季節的な居住なのかといった問題点は想定できるが、今後の課題としたい。

一方で、建物跡の機能については今後も検討する余地が残されているだろう。かつて第2類を核家屋的な施設(榎本2010)と想定しているが、第1類の中でも、上記の焼土遺構を伴うもののほかに、環状列石CのSR940や、環状列石Dの9SN01のように建物内に埋設土器(埋甕)が認められる事例がある。今後は掘立柱建物跡それぞれの機能や、役割の差にも十分に議論を深めていくべきであろう。

2. 溝状遺構

縄文時代の環壕が発見された静川16遺跡(北海道)が有名である。中期末～後期初頭で、全長139mの環壕で、壕の深さは1.0～1.8mと大規模である。区画された内側から竪穴住居が2軒検出されている。同様な遺構は丸子山遺跡(北海道)でも検出されており、総延長170mで、深さ1.3mを測る。この他に真脇遺跡(石川県)や小場遺跡(茨城県)、宮合貝塚(埼玉県)では居住域と墓域を隔てるように延びる溝状遺構を検出している。(岡村1997・佐原2005)。

東北地方北部においては、岩手県の下村B遺跡(中期末～後期初頭)が有名である。幅0.23～0.52m、深さ0.18～0.29mで、コの字状に延びており、周囲の遺構との関係では配石群と土坑墓群の多くは溝で囲まれ範囲に収まることから「土器の出土状態からは、溝の時期決定は明らかにし得なかった」としている(岩手県教委1983)。

秋田県内では白坂遺跡(秋田県教委1994)で発見されている。縄文時代晩期の溝状遺構(SD03)は、北地区とした調査区で台地縁辺に並走しており、調査で検出した長さは63.7m、確認調査で検出した部分を含めると77.5mに及ぶ。断面がU字状を呈しており、深さは最大で1.1mになる。さらに約10m離れた溝と並行する柱穴列を検出していることから、溝と柵木列のような組み合わせで、集落外縁を区画する施設と想定している。なお、この遺構の底面を覆っている炭化物層から縄文人の足跡を検出し、大きな話題になった。

このように縄文時代における溝状遺構は近年、全国各地で認められるようになった。およそ幅1m以上、深さ1m以上のものが多い。

伊勢堂岱遺跡のSD05は谷と谷を連繋するように広がっているので、区画された台地の先端部には住

居や何らかの施設が配置すると仮定し、調査を進めたが、予想に反してSD 9・15のような同様の遺構が検出された。竪穴住居や土坑墓のようなプランを検出していないので、現段階では何かの遺構を区画するための溝とは言い難い。

溝状遺構SD05は出土土器から伊勢堂岱遺跡第2～3期に構築・使用されたもので、第4期には造営は認められない。その造営は環状列石造営のピークと重なり、環状列石造営と同時に溝状遺構を掘削することは、相当な労力を費やしたのだろう。

検出したすべての溝状遺構の全長を求めると200mを超える。鉄器のない時代にこれだけの大規模な溝状遺構をつくることは、環状列石造営と同様に、多くの労働力をかけてつくられたことを評価すべき点であろう。

第4節 出土遺物について

本遺跡では、これまで具体的な数量で提示したように、労働生産用具や厨房具、工具などの第一の道具や、儀器・呪術具などの第二の道具が満遍なく出土している。

特にエリア①では、これらの遺物は偏りなく出土する。エリア①-1では、第3章で主要な出土遺物の空間分布を示したように、環状列石内側では遺物が少ないことを確認した。祭祀遺物のみならず土器片も同様で、これは列石内の空間を意識的に避けている証拠と考えられる。ただ、三脚石器や岩版類は列石内側にも分布しており、特殊である。

エリア①-1で特筆することは、旧道路予定地の調査で注目された大型不整形土坑墓である。環状列石A～C周辺で多く発見されており、この土坑墓から第二の道具が特徴的な出土傾向にあることが指摘されている(秋田県教委1999・五十嵐2000・小林2007)。出土した第二の道具は三角形土版、岩版類など様々であるが、その中でも土偶が極めて目立つ。ただ、第二の道具が集中することに対して、窪地に祭祀遺物が流れ込んだ可能性も想定できる。そこで土偶を出土した土坑を示した図を作成した(図143)。大型不整形土坑墓と考えられる土坑は17基で、環状列石A・Bなどの北側に集中する。土偶が出土したものは14基で、第1・2類の土坑から出土する例は極めて少なく、このことから「法則性・規格性」(谷口2008)が読み取れるので、偶然や自然の作用の中で混入したものではないと解釈でき、祭祀や儀礼として認定できるだろう。

エリア②や③では出土遺物自体は少ないが、大きな偏りがある。特に研磨器類は少なく、土製品・石製品はほとんどないことがわかる。



图144 大型不整形土地

第5節 伊勢堂岱遺跡の位置づけ

伊勢堂岱遺跡は4つの環状列石を主体とする遺跡である。これまで述べてきたように、遺構の空間分布・変遷や性格について検討することができ、特に環状列石の時間差については、調査での資料から検討することができた。一方で今後の課題をいくつか挙げるができる。

まず、環状列石造営には多大な労力を費やすことが予想されるが、列石下の盛土層に関わるデータを採取することは十分ではなかった。第1節でも述べたように、列石構築前の盛土層中の遺物が列石造営の年代を示す可能性が高く、列石の構築年代を明らかにするためには、盛土層中の炭化物の年代測定を検討するべきである。環状列石C・Dはそれぞれ全体の北半分のみで調査を終えているので、この課題を解明するための発掘方法も検討する必要があるだろう。

次に、溝状遺構で区画された範囲にどのような遺構が存在するのか。これまでは溝状遺構の広がりを含むためのトレンチ調査に限られたため、把握できなかった。面的な調査が必要であろう。

最後に、発掘は台地上を中心に実施した。台地には5ヶ所以上の大きな沢が認められる。沢A・Bと同様な捨て場や、近年事例が増加している水さらし場などの遺構が存在する可能性もあろう。

1. 伊勢堂岱遺跡の性格

米代川流域では縄文時代後期の遺跡が数多く発見されている。大規模な集落は、後期初頭では日廻岱B遺跡で、26軒の竪穴住居が環状集落を形成している(秋田県教委2005)。後期前葉では大館盆地の萩峠遺跡I区はあり、9軒の竪穴住居と13基の土坑墓で構成される(秋田県教委1981)。また、鷹巣盆地でも伊勢堂岱遺跡と同時代の遺跡が確認されており、藤株遺跡では十腰内I式新段階の竪穴住居が3軒検出されている程度である。また、石倉岱遺跡は後期前葉で昭和33年に鷹巣農林高等学校の大和久震平を中心に発掘調査が行われ、9基の配石遺構が出土しており、文献によっては環状列石と表記されることもあった。今日的な視点での調査が求められ、平成22年度から國學院大學伝統文化リサーチセンターと北秋田市教育委員会によって調査が進められているが、今のところ、住居は検出されていない。

環状列石が営まれた後期前葉では、それ以前の中期と比較すると拠点的な集落が少ないとされていた。これまで述べてきたように、環状列石外周の掘立柱建物跡の一部が平地式の建物構造であることが判明した。居住として利用された場合、本遺跡の環状列石周辺で狩猟具や研磨器類など生活に必要な道具を一通り保有することも理解でき、この地域に当該期の遺跡が少ないことも説明できると思われる。

以上のことから、伊勢堂岱遺跡が拠点的な遺跡である可能性は極めて高いと考えられる。研究史上、環状列石は墓域のみが注目されてきたが、環状列石周辺の広い範囲を調査したことで、これまで述べたように墓域・居住域・貯蔵域などで構成された遺跡であり、そこでは祭祀・儀礼や、死者への葬送儀礼が執り行なわれたのである。

2. 北海道・北東北における環状列石

縄文時代後期の直径30m級の環状列石は、大湯環状列石、小牧野遺跡、伊勢堂岱遺跡、太師森遺跡、